IFSC ルール２０１９変更点

２０１９年版の IFSC ルールは，１月にまず 1.6 が公開された．例年に比較すると異例の早さである，昨年が特に遅かっただけに，余計に早く感じる．

しかしこの 1.6 は欠陥だらけで，改行が抜けていて項目の表題が平文になっているなど，ドラフトとしか思われないレベルのものだった．そのため 3 月に入ると 1.8，1.9.2 と立て続けに改訂版がリリースされている．1.6 は，昨年のあまりの遅さに相当の批判があったために，無理に早い時期にリリースしたのでは？と勘ぐってしまう．

国内では，3 月初旬の段階ですでに 1.6 の翻訳作業は完了しており，最終確認を待って全文を公開しようという矢先に矢継ぎ早に改訂が出るという状況は，迷惑千万と言う以外のなにものでもない．結局 1.6 と 1.9.2 の全文照合という作業のため，日本語版の公開は大幅に遅れることになった．そしてさらに 5 月に入って Corrigendum と題して 2019 ルールの訂正が発表.

迷走状態と言われても仕方の無い状況である．

まあ，IF のワーキンググループにとっても，ルール 2019 は難産だったということではあるのだろう．

さてこの 2019 年版の変更点だが，全体としてルールの内容に極端に大きな変化はなく，表現の仕方が大きく変わったと言うのが大きい．同時にこれまで，明確でなかった概念を明確にしようという意図がうかがわれる．

全体的に表現が大幅に書き換えられているが，それは英語ネイティブでない国の人間でも理解しやすいものにするためだと言う．確かに以前に比較すると，英文そのものは多くの部分で平易なものになり，解釈はしやすい（いまだに訳の分からない言い回しが，部分的に残っているのも事実だが）．

また内容そのものが，単純化されているところが多い．ただこれも行き過ぎているところがあって，以前のルールを知らないと，それが何を言っているのかわからないという箇所も存在する．おそらくは Judging Manual などで補完されるということなのだろう．

なお本資料は、2019 年ルールの変更点に加え、IFSC が公開している”2019 RULES　Impacting Judges& Routesetters”の内容も含んでいる。

用語について

ルール 2019 では，冒頭にルール中で使用される様々な用語の解説が置かれている．クライミング競技のルールでは，従来から色々な用語が使用されてきた．だがそうした用語についてのまとまった定義，解説はなく，その意味は使用されている前後の文脈から理解する以外になかった．用語に対する正しい理解がなければ，正しく円滑な競技の運営はできない．その意味で，この用語解説は重要である．

多くは，従来からの理解を再確認する内容だが，従来明確な記述がなく意味が曖昧なまま使われてきた用語に明確な定義がなされたものもあるし，踏み込んで意味を提示してきたものもある．以下に主なところを紹介する．

Artificial Aid（人為的補助手段）は，以下のいずれかによって，体勢を安定（Controlling）または前進（Using）することを言う：

(a)　人工ホールド取り付けのために「T ナット」類の埋め込まれた穴；

(b)　クライミング面の，使用禁止として限定された部分；

(c)　クライミング面に設置固定された広告及びインフォメーション用のプレート類；

(d)　クライミング面の，そこで壁が途切れている左右及び上端の縁；

(e)　クライミング面に固定されたボルトハンガー；または

(f)　何らかの中間確保支点またはクライミング・ロープ；

Artificial Aid の従来の定義は上記の(e)，(f)あたりだけで，それ以外は Artificial Aid だからだめ，と言うのではなく，個別に禁止事項として規定されてきた．今年は，それらを列挙してこれらは Artificial Aid であると定義することで，禁止事項＝アテンプト終了の要件として，よりシンプルに規定することができるようになった．

Category（カテゴリー）は特定の性別と年令別グループの選手のグループを言う；

これまでクライミング競技のルールの中で「カテゴリー」は，男女の性別のみだった．これはユース大会が含まれるようになる以前に作られた概念が，そのまま使われてきたということで，ユースの年令別グループ（Age Group）はカテゴリーとは切り離された概念だった．2019 の定義によって，より実態に即した概念となった．

Climbing Surface（クライミング面）　　クライミング・ウォールの使用可能な面を言う：

(a)　そこにもともと存在するホールドを含む；しかし

(b)　あらゆる人工ホールド，ボリュームその他の一時的に使用可能な，（クライミング）面に取付け固定されたストラクチュアは除外する；

Climbing Surface（クライミング面）というのも比較的最近使われるようになった，直訳する以外に手のないやっかいな言葉だ．クライミング・ウォールの選手が登る面を指す．したがって，クライミング・ウォールを支える裏側の構造体などは含まない，と言ったあたりは，これまでも理解されていたところだ．ここではもう一歩踏み込んで，"natural hold"＝いわゆるパターンやカンテの扱いも規定している．

Control（コントロール／保持）は，判定と順位付けに関して用いられ，選手が何らかのオブジェクトやストラクチュアを使用して以下をおこなう事を言う：

(a)　安定した体勢を獲得する；

(b)　何らかのダイナミック・ムーブから静止する；あるいは

(c)　"Use"とは認められない何らかの登る動作をおこなった，

いわゆる「ノーマル」の定義になる．(a)はいわばスタンダードなノーマル，(b)，(c)は審判の判断に委ねられるノーマルということになる．(b)は，例えばランジを止めた後，体の揺れを止めないと（必ずしも完全に静止する必要はないが）ノーマルにはならない，と言うことを意味する．

(c)は，連続的な動作で，あるホールドで静止することなく次のホールドへのムーブを起こしたケースだろうと考えられる．コーディネーション的なムーブでの扱いになるだろう．リードの場合もそうだが，特にボルダーのボーナスの判定で問題になるところだ．

Legitimate Position（レジティメイト・ポジション）とは，リード競技で用いる場合，選手がそのルートをアテンプト中に以下の状態にあることを言う：

(a) 人為的補助手段を用いていない；

(b) 予め取付けられた中間確保支点に順番にクリップしている；

(c) 次の中間確保支点にクリップしていない時，選手が次の状態にある：

(1) チーフ・ルートセッターの設定した，安全性を保証する最後のホールド（Safety Hold）に達していない，またはそのホールドを通過しようとする何らかの登る動作を行っていない；

(2) チーフ・ルートセッターが当該の中間確保支点にクリップ可能であると判断した最後のハンドホールドを，両手とも通過していない．

レジティメイト・ポジションも明確な定義が無いまま使われてきたことばである．この用語解説の中ではリードのいわゆる「クリップに関するレジティメイト・ポジション」についてのみ言及されているが，レジティメイト・ポジション自体はいずれの種目でも，選手にアテンプトを続行しうる，何の違反事項もない状態になる．

「クリップに関するレジティメイト・ポジション」についての規定は，従来はリードのルールの中にあったものだが，この用語集に移した意図は今ひとつわからない．

この「クリップに関するレジティメイト・ポジション」については，クリップ可能な最終ホールドでの選手のムーブの評価が昨年のシーズン中に変更になっている．それまではレジティメイト・ポジションにある間におこなったムーブであっても，レジティメイト・ポジションとなる最後のホールドよりも先のホールドは評価しないとされてきた．それが覆りレジティメイト・ポジションにある間のムーブは全て評価するようになった．

しかし，上記(c)の(1)，(2)ではセーフティホールド＝青十字とそれ以外のクリップに関するレジティメイト・ポジションをわけて規定していて，両者を明確に区別することになっている．

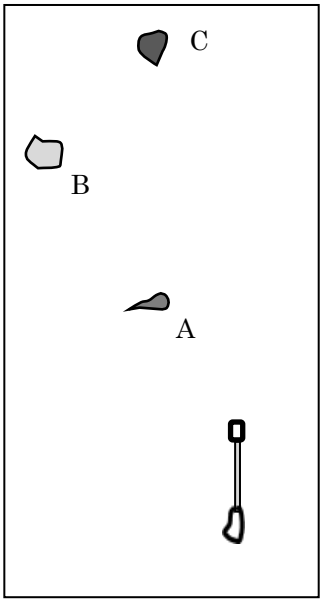
これはセーフティホールドであれば特定のホールドに限定されるが，そうでない場合はいずれのホールドがクリップ可能な最後のホールドなのか定めがたくラウンド中に変化する可能性があるからだろうと思われる．

セーフティホールドの場合は，その名前のとおり安全上の理由で設定されるので，それを通過することを認めない，という考え方に立っているものと考えられる．それ故に上記（1）のような踏み込んだ書き方にしているのだろう．ただ(c)の(1)を字義通りに適用すると，セーフティホールドより先のホールドへの何らかのムーブを起こした時点でレジティメイト・ポジションを外れることになり，競技中止になってしまうように読めてしまう．

しかし例えば，セーフティホールドをコントロールしたその時の体勢ではクリップできず，一歩上がる必要があるケースなどざらだろう．もっと踏み込んで，「アクシス上の次のホールドまたはさらに先のホールドに手を伸ばす動作をおこなった場合」くらいまで細かく規定する必要があるようにも思う．

実際の運用上は，" RULES 2019 CHANGES "では”where a Safety Hold has been marked (the “Blue Cross”), scoring is “stopped” at the marked hold until the relevant protection point has been clipped.”とあり，未クリップの状態ではセーフティホールドより先のホールドへのスコアリングは行わないとしている．そうであれば，未クリップでもムーブをおこなうことは可能で，単に判定をセーフティホールドのコントロール止まりとするのが実際の運用と考えるべきだ．セーフティホールド「を通過しようとする何らかの

登る動作を行っていない」と言うのは，レジティメイト・ポジションにあることを保証する条件として割り切り，競技中止の判断のタイミングは従来通りセーフティホールドを通過した場合とみるべきだろう．



セーフティホールドでない場合は，今年の変更で気になるところがある．

従来、レジティメイト・ポジションの条件として他の選手がクリップ可能だったホールドを通過していないこともあげられていたが、今年はそれが削除されセッターの判断のみとなっている．これは，ある選手がクリップ可能とセッターが判断したホールド（右図 A）を通過したため競技中止となった後に，別の選手がさらに先（右図 B）でクリップしてしまった場合にもあくまで限界はセッターの判断したホールド（右図 A）として処理する，という風に読むことが可能である．

ただしこの規定は，ホールドが破損して形状の異なるホールドで代替した場合のように，その判断を抗議の余地のないものとしているわけではないので，セッターの判断の誤りとして抗議することは可能と思われる．

このあたりは不明確なので，現時点での現場の対応としては従来通り，クリップ可能な最終ホールドを通過した場合の競技中止のタイミングにはマージンを取ると考えるべきだろう．つまり危険のない範囲で，ある程度登らせると言うことだ．

その上で，さすがに誰でもクリップできないと思われるところ（右図 C）でストップをかけて，クリップ可能と思われる最終ホールド（右図 A）で成績判定をする．それであれば，仮に他の選手がさらに先のホールド（右図 B）でのクリップに成功して，最初の選手が抗議をした場合でも、その選手の成績を右図 B のホールドに変更することで対応できる．

Transit Zone（トランジット・ゾーン）とは，競技エリアの中で，選手がそのルート／ボルダーでの競技に備える（または回復を図る）ために設定された特定のエリア．

トランジットは従来明確な定義が無いまま，ルールの中で使われていた．使われていたとは言っても，競技エリアに包括されるものとしてあげられている他は，ボルダーのインシデント処理の中などのみで，見落とされていた言葉である．

2019 では，このトランジットがかなり積極的に使われるようになっている．具体的には，テクニカル・インシデントの確認/修復を待つ間に選手の隔離される場所，ボルダーのローテーションタイムの間の休憩中に選手のいる場所がトランジットになっている．コールゾーンも，一種のトランジットになる．今後はこのトランジットと言う言葉が国内でも使われていくものと思う．

7.リード

7.1　B)

この項目は競技会のラウンド構成の規定．2018 まではこの部分に「不測の事態の場合は，ジューリ・プレジデントはラウンドのうちひとつを省略することができる．1 ラウンドが省略された場合，先立つラウンドの結果を省略されたラウンドの順位とする．」という文言があったが削除されている．そのかわりに各大

会の規定にジューリ・プレジデントの権限でラウンドの中断や再開などが出来ると言う記述，さらにテクニカル・デリゲイトの権限で大会そのものの中止ができるという記述がある．

7.10　以下の場合には定められた最低限の間隔を置かねばならない：

A)　予選の最初のルートのアテンプト終了と，2 番目のルートのアテンプト開始の間に 50 分以上；

B)　競技会の連続する 2 つのラウンドが同日中に行なわれる場合，最初のラウンドの最後の選手の競技終了と，後のラウンドのアイソレーション・ゾーンの受け付け終了の間には 2 時間．

従来の，アイソレーション・クローズから競技開始までの間に置くべき時間の規定がなくなった．運用上に大きな変化は無いだろう．

7.14　オブザベーションは：

A)　予選の各ルートのデモンストレーションを，以下のいずれかの方法でフォアランナーがおこなうものとする：

1)　ウォームアップ・エリアで，ビデオ録画を連続して再生する．再生開始はそのラウンドの開始予定時刻の 60 分前より以後であってはならない；

大きな変更ではないが，2018 ではこの 7.14A)1)に該当する部分には，デモ・ビデオの「再生の開始はそのラウンドのウォームアップ・エリアのオープン時で，いかなる場合もそのラウンドの開始予定時刻の 60 分前より後であってはならない．」とあった．ウォームアップ・オープン時の縛りが消えている．

7.19　ルート中のハンドホールドのチーフ・ルートセッターが（IFSC との協議によって）規定した評価値を記入したルート図（"トポ"）が：

A)　競技会の各ラウンドの開始前に作成されるものとする；

B)　準決勝と決勝では，速やかに関係チーム・オフィシャルが利用できるようにすべきだが，それは当該ルートのオブザベーション前ではなく，彼らが競技エリアを離れた後とする．

チーム・オフィシャルへのリードのルート図の公開が義務づけられた．通常はオフィシャルボードへの掲示になる．ルール上はチーム・オフィシャルへの提供だが，通常の国内大会では一般も含めてオープンになる．

7.15　各ルートでの競技期間は 6 分間とする．各選手は，テクニカル・インシデント申告後に追加アテンプトが認められた場合を除き，各ルートで 1 回のアテンプトが認められる．特定の場合，すなわち競技会がアフターワークで行なわれる場合は，別途プラクティス・ピリオドが設定され，その間は人為的補助手段の有無を問わずアテンプトを行なうことが認められる．

上記の下線部は，ワークトによる競技の可能性を規定するものだ．同じ規定はボルダーにもある（8.13）．

現実にワークトでワールドカップなどが行なわれるという話は聞かないが，例えばアルコのような大会では，以前ワークトをおこなっていた．こうした大会形式を，IFSC ルールの枠組みに組み込むためという可能性はある．また将来のオリンピックや FISE のような大会のフォーマットへの布石とも考えられる．

7.17　選手のアテンプトは：

A)　選手の身体の全てが地面から離れた時に開始したものとされ，競技時間の計時が始められる．な

お，選手がスタートしたのかスタートする前にポジションを調整しているのかの判断の裁量権はルート・ジャッジが有するものとする．

選手が両手と片足を各ホールドに置いて，残る足の位置をずらすため軽く跳ねることがある．”2019 RULES Impacting Judges& Routesetters”には" little hops to readjust a start position could be accepted"とありこれについては明らかにスタートしようとして失敗した場合以外は（ルート・ジャッジ判断で）OK ということになる．

7.22 各ルートの順位付：

B) 競技を行わなかった全ての選手はそのルートで最下位となる．

下線部の原文は" any competitor who fails to start"．スタートリストにある選手がアテンプトを行なわなかった場合を指す．スピードの不正スタート（false start）とは異なる．

7.30 抗議での対応：

特定のホールドでの選手の成績判定に関する抗議の場合は，抗議審判団は同じホールドを保持（Controlling）または使用（Using）したと判定された全ての選手の成績を再判定すべきである．

国内でも一例として福井国体で，2 つのホールドのところ（あるホールドの controlled と used，そして次のホールドの controlled）に 40 名がひしめくという状態になった．下のホールドの used か上のホールドの controlled かの判定に抗議があり，結局この 40 名全てのビデオ記録を確認することになった．

40 名のビデオ確認というのは，1 人 30 秒でも 20 分．実際には SD カードから選手のビデオを拾って再生して，ということですのでもっとかかる．大変な作業だが，やらざるを得ない．またこうした事態を防ぐには，逐次的なリザルトの公開と競技進行中のビデオ確認以外に方法はないだろう

8 ボルダリング

8.1 B)

不測の事態の場合は，ジューリ・プレジデントはいずれかのラウンドでの 1 ボルダーの省略をすることができる．

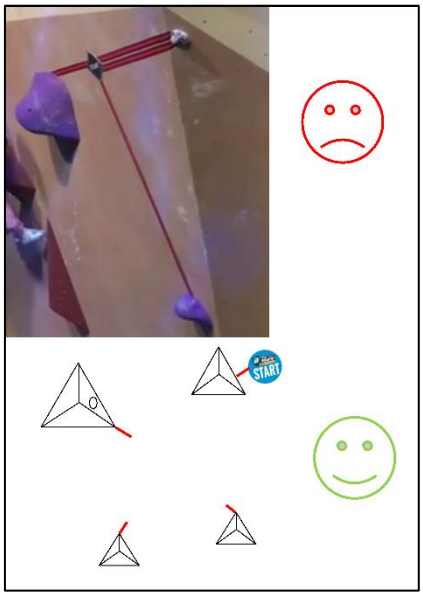
リードと同様この項目は競技会のラウンド構成の規定で，不測の事態の場合の 1 ラウンド省略の規定はボルダリングでも削除されている．

なお，いずれかのラウンドでボルダー数を 1 減できるという規定は残っている．

8.2 ボルダーの設定：

C) 以下について，各ボルダーに明瞭に識別できるようにマーキングされるものとする：

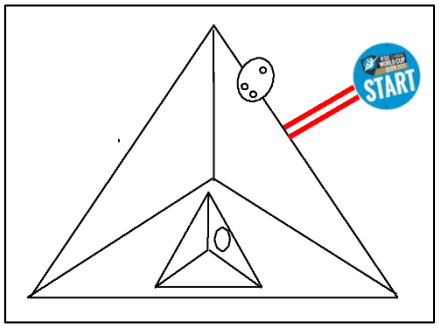
1) "スターティング･ホールド"は両手, 両足について設定するが，指定される中にクライミング面の何もないところ，囲まれていない部分が含まれることはない．スターティング・ホールドについて，手のための特定のポジションをマーキングすべきではない.



下線部の原文は" The Starting Holds should not be marked with specific positions for the hands.". これだけなので意味不明．ルール 2018 では 7.2.5Ⅳにあった，ハンドホールドの左右の別を指定できるとした規定を否定するものかも知れない.

また”2019 RULES　Impacting Judges& Routesetters”には右のような図でスタートのマーキングの悪い例と良い例が掲載されている.

スタートポジションに関しては，同じく”2019 RULES Impacting Judges& Routesetters”に右の図とともに簡単に言及がある.



昨年複数のボリュームを隣り合わせて組合せて一括で扱うことが出来ると言う見解も当初示されていたが，これについても覆り，従来とほぼ変わらない理解となった（別紙資料 2 参照）.

8.16　各ボルダーで少なくとも 1 名の国内審判が判定をおこない，以下を記録する：

A) 各選手のおこなったアテンプト数．アテンプトは選手が以下を行なう都度カウントされる：

1) 適正（Correct）であれ不適正（Incorrect）であれスタートした；

ボルダーでスタートポジションにきちんと入らずにスタートしたような場合を，従来はスピードと同じ false start と呼んでいたが，2019 からこの incorrect が使われるようになった．False start は陸上などのいわゆるフライングを指す用語として定着しており，ボルダーの場合も同じ表現で表すと混乱するところがあるのは確かなので，新しい用語を当てたのだろう.

8．17　選手のアテンプトは：

A) 以下の場合に失敗と判定される；

1) 選手が不適切な（Incorrect）スタートをした；

スターティング・ポジションについては昨年の変更で，両手のスタートポジションについては安定した状態を必ず作らなければならないとされていた．これが手についても足についても，その手/足以外の手足で安定した状態が作り出せているなら，残りの手/足はスタートホールドに触れるだけで良いと言うことに変更された.

B) 一方，選手が以下の状態で体勢を維持している場合に「完登」（successful）となる；

1) 両手を終了ホールド（Top Hold）に揃えている；

完登の両手の扱いは様々な変遷を経ている．今回は揃える（match）となったが，どのような表現をとる

にしても，やたら小さいトップホールドが使われるようなケースがあると，結局もめることになるように思われる．

8.18　選手のスタートは以下の基準で判定される：

A)　「適正」(Correct）とは，選手がスターティング・ホールドに両手，両足を置いて，それ以外の人工ホールドやストラクチュアを保持（Controlling）または使用（Using）することなく安定した体勢（a stable Controlled position）をとること．なおボルダーでのスタートにあたって，選手は以下のことは認められる：

1)　スターティング･ホールドに達するために，クライミング面に触れたり，それを保持（Control），使用（Use）すること；あるいは

2)　ブロッカー・ホールドに触れること，

ボルダーのスタート関連の規定では，スタートポジションに入るまでの間に触れても，場合によっては使用しても良いものが明確化されている．上記 1)では，壁の何もないところについては触っても使ってもよい，となっている．例えばスタートポジションに入るまでに壁にスメアするのは許されることになる．セッターもそうしたことを考慮したセットをしてくるかもしれない．またカンテについては，デマケーションがない限り，スターティング・ポジションに入る前でも使えることになるし，凹角であればステミングもありうる．

スタートの適正/不適正の例のビデオを IFSC が公開している．

1　https://www.jma-sangaku.or.jp/climbing/up_img/images/fanny-gibert.mov

2　https://www.jma-sangaku.or.jp/climbing/up_img/images/manu_cornu_1.mov

3　https://www.jma-sangaku.or.jp/climbing/up_img/images/miho.mp4

4　https://www.jma-sangaku.or.jp/climbing/up_img/images/kai-harada_2.mov

5　https://www.jma-sangaku.or.jp/climbing/up_img/images/janja.mov

このうち 2 のみが適正でないスタートだ．映像ではマーキングが見えないのだが，2 つの大きい三角ハリボテがスタートポジションのようだ．左足が三角ハリボテにはいっさい触れていない除隊で右手が伸ばされ，上部のホールドを取って初めて左足がハリボテに置かれているのがわかる．

3 もマーキングが映像ではわかりにくい．スタートポジションは左の半球ハリボテと，スタートのプレートの付いたホールド，そして右のカンテ際と右のコーナー側壁の上部の 4 つと思われる．選手はスタートポジションに入る前にホールドのないカンテ付近をおさえているが，上記のように壁のホールドのないところは自由に使えるため，これは適正なスタートとなる．

また下のような事例が”2019 RULES　Impacting Judges& Routesetters”に掲載されている．

コメントでは，選手は親指でスターティング・ホールド以外を使っているので不適なスタートであるとのことだ．画像が今ひとつ鮮明さに欠けるので判然としないが親指の辺りの白い部分にジブスが付いているのか，ハリボテに親指がかかっていることが問題なのかはっきりしない．

いずれにしても，これはスタートポジションの設定が引っかけ問題のようで，設定に問題があるのではないか？セッターサイドで，こうした場合はホールドの付いているハリボテ全体をスタートポジションに指定すべきだ．

2）のブロッカー・ホールドは，ホールドの保持できるところの上に取り付けて保持しにくくする，あるいはフットホールドとしては使いにくくするもの．スタートポジションのホールドにこれが付いている場合は，これに触れてもかまわない．ただこれを単独で使用することはだめ．つまりブロッカー・ホールド自体はスタートホールドとは別物という考え方である．

次の写真はこれも”2019 RULES　Impacting Judges& Routesetters”に掲載されているもので，ブロッカーホールドには触れても良いが，写真のように親指で使ってはいけない，とコメントされているが，これも写真が不鮮明で良く分からない．

9 スピード

9.18　決勝及び最終順位

A）選手は，競技を行った最後のステージから順に決勝ラウンドで順位づけられるものとする：

1)　第一に，各ステージでのレースの勝者：かつ

2)　第二に，各ステージの敗者は，そのステージの時間記録で順位づけられる

2)の決勝各ステージの敗者の順位は 1.6，1.8 では，予選順位で（いわばカウントバックで）決めるとされていた．そのため 2 月の SJC はそれにしたがって順位を出したが，その後 1.9 で 2018 までと同じく，そのステージでの敗者同士の時間記録比較で決定することに戻った．

11 コンバインド

11.2 複合競技のための競技会は，以下を含まなければならない：

A)　各カテゴリーにつき 20 名の定められた定員で行われる予選；および

B)　各カテゴリーにつき 8 名の定められた定員で行われる決勝

決勝の定員が 8 名となった．これはスピードの決勝第 1 ステージが 6 名ではあまりに変則的だからだろう．そもそも何を考えて，当初 6 名としたのか，疑問．

11.10それぞれのステージでの順位は以下のように算出されるものとする：

A)　各スピード・ステージについては，以下の修正点および追加点を加えた本ルールの 8 節（スピード）の規定に従う：

1)　1/4 ファイナル・レースの敗者は，8 名中の 5 位を決定する一連の追加レースに進出する．これにより全ての選手が同じ数のレースに参加することになる．

2)　スピード・ステージ後の決勝の一連のレースで決定される．

a)　レース 9 は 7 位（勝者）／8 位（敗者）を決定する

b)　レース 10 は 5 位（勝者）／6 位（敗者）を決定する

c)　レース 11 は 3 位（勝者）／4 位（敗者）を決定する

d)　レース 12 は 1 位（勝者）／2 位（敗者）を決定する

従来のルールでは，スピード・ステージで早めに敗退した選手はレース数が少ないため，より疲労の少ない状態で，次のボルダーの臨めることになる．これを平等にするために敗者同士を対戦させるようになった．

1/4 ステージ	1/2 ステージ	ファイナル・ステージ	
A　予選 1 位 B　予選 8 位	5　A　レース 1 敗者 B　レース 2 敗者	9　A　レース 5 敗者 B　レース 6 敗者	7 位/8 位決定
A　予選 4 位 B　予選 5 位	6　A　レース 3 敗者 B　レース 4 敗者	10　A　レース 5 勝者 B　レース 6 勝者	5 位/6 位決定
A　予選 2 位 B　予選 7 位	7　A　レース 1 勝者 B　レース 2 勝者	11　A　レース 7 敗者 B　レース 8 敗者	3 位/4 位決定

A　予選 3 位 B　予選 6 位	8　A　レース 3 勝者 B　レース 4 勝者	12　A　レース 7 勝者 B　レース 8 勝者	1 位/2 位決定